

発刊によせて

世に「机上の空論」という言葉がある。現実の社会で悪戦苦闘する者から見れば、学者が机の上で考え出した理屈など空虚で役に立たない。そういう意味である。福沢諭吉は学者の仕事も豆腐屋の仕事も同じと言ったが、いわゆる実学の分野に当てはまる話かと思う。非実学的な哲学・思想の探究が、社会的な分業の一形態として成り立っているように見えない。哲学者の中には自分たちの仕事を虚業と割り切る人がいて、いよいよアカデミックなサロンの世界に閉じこもる姿がある。

むしろ、真に虚業なるものは世の中に存在しない。というより、存在できない。たとえ観念の遊戯であつても、現実を違った角度から見つめ直すきっかけにできるし、純粹に思考のトレーニングともなる。哲学や思想を語る営みには、ある種の実用的な価値がある。哲学者、思想家といった職業が世にあるのは、一つはこのためである。

ただし、それはまだ本質的な論点ではない。思想の根本的な役割は、発想の転換などよりも心の触発にある。「文は人なり」と言う。人の心が形となったものが文字であり、文である。詩や小説と同じく、客観的に書かれた論文も、作者の心の現れと言える。精緻な学説は理性の産物と思われがちだが、その理性を使っているのは心に他ならない。科学理論でさえ、実は心の結晶である。

われわれは書物を通じて著者の心を受け取る。思想書を読む場合は、思想と渾然一体となった著者の心が読者の心に染み渡っていく。読書とは、著者の心が読者の心に入り込むことである。そこで読者の心が揺さぶられるなら、その人の生き方が変わり、行動が変わり、周囲に影響を与え、引いては社会全体が変わるかもしれない。

技術者は物を動かし、政治家は国家を動かす。思想家は心を動かす。思想を語る者は、心という最も根源的な所から社会を動かしている。そのことは、すでに歴史が証明している。思想は、決して机上の空論にとどまらない。

さて、そうした観点から東洋の思想を見直してみると、それが現代社会に果たし得る役割は非常に大きいと言えないだろうか。西洋が物の論理を發展させてきたのに対し、東洋では心の論理を追求してきた。心の論理は物の論理の根底にあつて、一切を包容する。そのため、どんな人の心にも直接響いてくる。「義を見てせざるは勇無きなり」との「論語」の言葉は、心の論理である。道理を踏まえた勇氣の心を、われわれに吹き込んでくれる。人間の心が衰弱した現代にあつて、心の論理を説いた東洋の思想は、社会を変える最も強力な武器となるだろう。

平成二十六年二月吉日

東日本国際大学
東洋思想研究所長

松 岡 幹 夫